

特攻隊(特別攻撃隊)

特攻隊とは、特別攻撃隊の略語で爆弾を積んだ戦闘機等で敵に向かっていき、必ず死ぬことが義務付けられていた隊のことです。

松本にもいた特攻隊

実は、松本にも特攻隊がいました。

しかも、松本の特攻隊は絵本にもなっているんです。その絵本の題名は「僕のお嫁さんになってね」です。この本では、松本市の浅間温泉にいた特攻隊員と、疎開してきていた小学生の交流が描かれています。



都会から松本に来ていた疎開児童は、同じく松本に来た兵隊さん達と仲良くなりました。ある日、田中さん（疎開時）は、大好きな今野さん（兵隊）に故郷はどこか聞きました。今野さんの故郷はお米のおいしい宮城県でした。

田中さんは、私も宮城のお米を食べてみたいといいました。すると、今野さんは「自分が帰ってきたら、お嫁さんになってくれ」、といいました。その後特攻隊員たちは、出撃のために松本を去って行きます。

私は、この今野さんのセリフを読んで、今野さんは、生きて帰りたいとおもっていたんじゃないかと思います。「僕が帰ってきたら」や、「僕のお嫁さんになってね」など、生きて帰ってからのことを語っていました。その後、今野さんがどうなるかは、この絵本を読んであなたの目で、確かめてください。

一枚の 紙切れのみの 骨壺が 還りて母の 胸に抱かれぬ 保科郁夫さんの短歌（遺族の思いより引用）

私は、この短歌を一枚の葉書だけが、母のもとに届き、それが形見（骨壺）として、母の胸に、抱かれているという風な解釈ができました。

この短歌を読んで、自分の息子が戦死して、骨も残らず、届いた葉書だけが形見になるなんて、とても切ないし、もし、私がこの短歌の、母親の立場なら、自分より長く生きていてほしいと思ったはずです。

私は、この学習をしてきて戦争の恐ろしさをより実感しました。自ら命を捨てるなんて今じゃ考えられませんが戦争のときはそれが当たり前で、当時は、今のような考えがおかしいと思われてたと思います。今は、戦争が終わって、命を大事にするのが当たり前になっていますが、昔は、死にたくなくても、特攻隊のように命を投げ捨てなきゃいけない時代も、あったことを学び、次の世代にも伝えることが私たちのやらなくてはならないことだと思いました。

